

も許されない強制作業は、まさにこの世の地獄図絵そのものであった。

二十二年ころからは、食糧事情も定量配給となり、ノルマの達成も一〇〇%を超すようになってきたので、食糧配給がその分余計となるようすとなった。ソ連人の労働能力も、余り良いとはお世辞にも言えたものではなかった。

日本新聞で収容所の洗脳教育も行われたが、一日も早い祖国生還が本音なので、形式的にだけ賛成の態度をとった。一旦ダモイ組としてナホトカまでは行ったが、待機者が多いとの理由で、また他の原始林伐採に行かされた話も聞いたので、ソ連人の言葉を一応疑ってみるようになっていたが、日の丸を掲げた船のタラップを登り切ったときは、ほんとうにホットした気持ちだった。みんな泣いて喜び合った。

二十三年十一月舞鶴港に入港して、抑留を終わった。

銃殺刑から生還

広島県 平 本 直 行

聞き手（木村茂久男） 平本さんどうも、ご苦勞をかけます。年末で忙しいのに大変恐縮しています。慰霊祭なんかの段取りでいろいろあって、結局、聞き取り調査も、うちが一番しまいになろうと思うんです。あなたは特に、シベリア抑留中には、非常に悲惨な目に遭われたということをお聞いしておるんで、これからひとつ伺いしますので、ひとつよろしくご協力をお願いいたします。終戦時はあなたはどこにおられましたか。

平本 関東軍司令部。

聞き手 関東軍司令部。それから。

平本 それから、終戦になって、原隊へ復帰しました。野戦工廠の第二十六連隊へ帰ったわけです。それから、公主嶺へ集結。公主嶺から黒河へ向かって、一番の最初の出発ですね。ソ連抑留の第一歩を我々が、九月の

二日に黒河へ着いたんです。これより早いのはおらん。

あそこで、船がないということで約五日ぐらい待ちました。そこへ行くまでが三日ぐらいで。今さっき、いろんなことを聞きましたけれども、そういうようなのでなくて、三日ぐらいで、黒河まで。黒河で五日ぐらいおつて、船が来まして、ブラゴエチェンスクへ渡りました。

ブラゴエでは二日ぐらいたったと思いますが、やっぱり野営しました。向こうの泥棒がやってくるんで、歩哨を立てて、もちろん我々、帰るんだからということで、十人に一人は銃を持っていましたんで、それが一つの、我々は捕虜じゃないという意識を物すごく強うさせられたということです。

武装解除でも、いわゆる匪賊とか、あるいは馬賊とか、あるいは中共とか、あるいはソ連も食糧がないんで、泥棒がようけおるから、十人に一丁持たすというところで、我々本部づきは拳銃も持っていました。階級章ももちろん。

聞き手 それは珍しいね。

平本 それで、撃つことは、向こうが言わん限りには

撃っちゃいかんということではありました。それで千五百人入ったんですけれども、向こうの人間が二十人か二十五人ぐらしか、それだけの護衛がついていけませんで。

聞き手 一個大隊が、大体千五百人だからね。

平本 もちろんパチカリョウからウラジオストクへ出る、それで日本の船が来たらお帰するというところで、終始そういうことで連れていかれた。あそこで二日間の間に、直径が二・五センチぐらいのひょうが降りました。それは驚きました。たくさんを負傷者も出ましたし、私も歩哨に立っておったんだけど、コブが二重になって、その上裂けまして、びっくりしました。

そのときに、やっぱりソ連の子供たちが泥棒に來まして、相当とられました。追うていって、追うていったばかりに、逆に自分のものを持っていられる。グループでやりますから、それでやられた経験がありますね。結局、パチカリョウへ着きまして、いよいよこれからウラジオへ出るんだということで、今までは何ぼか、ドアがちよっとあけてあったんですけれども、そこでもう完

全にドアんが閉められて、真っ暗な貨車の中で、ゴトゴト汽車は走る。でも、どうも東へは行きおらん、西に行きおるといふようなことをみんなが言うような状態で、これはだまされたかなというのが、二日ぐらい汽車の中で。

原っぱへ汽車がとめられまして、引込線がありました。そこで降りて、我々は高射砲ですから、お月さんを見る観測班がいますけれども、これはとんでもない方へ行きおるぞ、モスクワの方へ向いておるといふようなことを観測班が言い出して、ソ連の将校みたいなのに交渉に行ったところ、実は船が来んの、ナホトカがいっぱいになっておると。どうしようもない。そう遠くまで行きません、わずかのところへ行つて、そこで一たん待機してもらふと。そこで三日目、四日目ごろに、チタ州のシバキへと。これはソ連の島流しの村と言われて。

聞き手 日本で言う刑務所だね。

平本 あちこちにいっぱい火の見やぐらのようなものが建つていまして、その上から町全体が見れるような、そういうところへ連れていかれた。そこで約十五日ぐら

いの間に、自分らが住む家を、材木も板も十分ありましたから、家をこしらえた。寒さはどんどん厳しくなつてきます。もう十月へ大方入りかかつてましたから。

家はできた、人間は三段のベット。草を拾う方は草を拾う方で、どんどん駆けずり回つて、草をいっぱい集めてきまして、ベットをこしらえる班、家をつくる班といふようにやつて、そこへ寝起きはできるようになつてきた。

でも、おかしいことに、収容所へ鉄条網が引かれたといふことです。それに電氣を通された。それでも、大きなショックを受けましたね。今までは軍人に賜りたる詔書、勅語を毎朝、東方遥拝で拝んで、部隊長の訓辞を聞くという、もとの軍隊のままの状態が、急にその辺りからおかしくなつて。というようなことが起きまして、十月いっぱい……。

聞き手 家が建つたわけ。

平本 建つのは十五日ぐらいで建つただけでも、十月いっぱい死亡者が、日に三人の死亡者が出だしたわけ。それで、将校がほとんどどこかに連れていかれま

して、玉木少尉という、終戦将校ですけれども、もともととは内務係曹長で、それが司令になりました、十月の終わりにごろに私に、本部へ来いと。行きましたところ、どうもこれは、ここにおるのが長引きそうだ。現在三人ずつ死ぬということは、千五百人の人間が全部死ぬには三年かからないという計算になる。まして、これだけ寒くなってくると、今までの三人以上に、これから冬は死ぬだろう。平本、おまえ、済まんけど、わしに命をくれんか、というようなことを言われました。

聞き手 それは部隊長が。

平本 司令ですね、玉木少尉。これは名古屋の駅前で喫茶店をやられておったんですけれども、連絡はようわからん。その玉木少尉がそう言われるんで、私は初年兵のときに当番もやっておるし、非常にかわいがっていただいた将校さんだったもんだから、それはもう命は出しますよと言ったところが、結局、今ソ連へどんどん送られてきよる数を見ると七十万とも言われておる。これが日に三人ずつ死ぬということになると、各収容所で死ぬということになると、長うもたんぞ。どうしてもその実

情をマッカーサー連合軍司令官へ通知をしなきゃいけない。恐らくカーテンの中へ入れられてしまうところだろうから、そのために、ここから満州までは、直距離十里しかない。だから食糧さえあれば、頑張って歩けば三日ぐらいで行ける。もちろん満州へ入って、お前みたいに、シナ語はうまくないんだから、町田という通訳をつけるから、そこからは町田と行動をとみにせいと。

七人が出る、みんな密書を持ってもらう、どれか一人でも日本へたどりつくという戦法でやってもらいたいということを聞きました、私は「やりましょう」ということで、時計とか、いろんな毛布とか、食糧と交換しまして、ジャガイモ、それからパン、そういうようなものを集めまして、大体一週間分を集めた。我々は製材所の労役に服しておったもんですから、その板の下に隠して、いよいよ出発の日にそれを取りに行ったら、日本人に皆取られてしまって、同僚にやられてしまった。

それで玉木少尉のところへ言うて行ったら、それはもう七人はもう無理だ。二人だけで逃げてくれ。そうせんと、これから寒うなったら、いよいよ歩かれんようにな

るから、雪は深こうなるし、二人だけで通訳と逃げてくれ、ということ、玉木少尉がどこでどのようにしていたのか、すぐ二人だけの一週間分の食糧をくれまして、十一月の二日にシガキの収容所を出ました。

それから、満州へ満州へと約四日―九四日ではないんですが、三日何がして、もうウスリー江へ着きました。それがちょうど、月がこうこうと、向こうの月が素晴らしく明るくて、よく凍つとるウスリー江も、向こう側もよく見えますし、これで世話ないかなと言ったところが、銃声が聞こえた。これはどこで銃声があったんだろうかということで、我々は、町田と、これでは、もし我々の後を足跡を追うてこれとったら、飛び出したらもうやられる。だから、月が落ちる瞬間をねらおうと。この時分が一番暗いんで、それを突破しようということ、月が降りるのを待って、腹ごしらえをしようということで、火はたけませんから、パンをかじって。

それで、月が落ちて、すぐ突破にかかりましたけれども、照明弾を打ち上げられまして、そしてマンドリンでバリバリと。町田がまず大腿部を撃ち抜かれて、おま

えだけでも逃げてくれとは言うものの、放っておくわけにはいかんから、背中に負うて、駆けるというたつて、凍っておるんですから、もう駆けられない。そのうちにどんだん網を狭められて逮捕された。

聞き手 攻撃してきたわけやね。

平本 最後はもう撃たんですね、どんだん攻めてくる。こっちが武器を持っていないですから。それだから、とうとう捕まってしまった。捕まってから、すぐ、どっちの方向へ行ったのかわかりませんが、馬に乗せられて、途中、食事を三回か四回かしましたから、大分な距離を馬で駆けたと思うんですが、そこへ着きましたら、何かれんがづくりの家で、そこでまた二日ぐらい、向こうの兵隊は全然来ずに、町田と二人だけでその家にいた。外へは兵隊がグルグル回りおるといような状態で待たされた。今度は向こうの将校が三人ほど来まして、君たち、言い伝えたいことがある。七つの罪状が判明したので、君たちはその七つの罪状によって即刻死刑にする。こういう言い渡しを。

聞き手 その七つの罪状というのは。

平本 反ソ的思想の持ち主の罪、上官侮辱の罪。まあ、途中で逃げよるときに向こうの将校と会いましたから、作業班が何かしよると思うて、向こうは何も言わなんだので、我々は黙って敬礼もせずに通ったというようなことで、罪をつけられた。それから共謀の罪、それから脱走の罪というような。

聞き手 それで七つの罪状、これは大変だ。

平本 で、即刻死刑と。

聞き手 それなら、やっぱり銃殺じゃね。

平本 これから段取りをするので、そのコンクリートの中で死刑を執行すると。よう見たら、今までこれは死刑場に使っていたんじゃないかなというようなところでしたね。その部屋から出されて、広いところへ行ったら、一番遠いところで二十五メートルしか距離がなく、十三階段あったかどうかかわかりませんが、その後ろで火をたくわけです。もう火はたいてました、私らが二人、中へ引っ張り出されたときは。

町田の方が年上だから、先に死刑をやると。おまえはここで見ておれということで、台の上へ町田は上がつ

て、目隠しをして、目隠しの前に遺言を書かしまして、「死刑をただいまより執行する」というんで、死刑の要綱を日本語で読み上げましたね。三発の弾しか撃たない。拳銃の中には五発弾が入っている。距離は十五メートル。二発は試射すると。銃がいいか悪いかを調べる。後ろの三発で撃つから、当たらなかった場合には動いてもらっちゃ困る。これはソ連には国外追放という法規があるので。動いたら、サルダートが切ってしまうから、絶対に動かんように。そういう死刑の順序でやるからと。

後ろへ背中が熱いぐらい火をたきおる。だから、それが映っていますから、地獄絵に等しいような部屋でしたね。それで町田は、二発の試射を、右左から、ピンポン玉のような、ガラス玉ではなくて、ちっとゆっくり落ちる弾を二発落とす。それをパンパンと撃つわけです。するとパチンパチンと割れる。それで「ハラショー」、この銃はいいということで、一発で町田は落ちてしまふ。もちろん完全に心臓を抜いて、パーッと血も出ましたし、それで後ろの火の中へ。そのときに何かギャーとか何と

か、断末魔のような声を聞いたような気がします。

聞き手 そうじゃろうね。これはもうむごいもんじやな。

平本 今度はそれが終わって、しばらくしてから、おまえの番だということで、私が行ったんですけれども、「遺言はないか」と言うから、「遺言はない、どこからでも撃ってくれ」、目隠しと言うから、「目隠しは要らん」と私が言うたら「それじゃあ、ただいまより死刑を執行する」と。まだ二十二、三歳の若い射手で、前の射手とまた違う射手でやる。

聞き手 なるほど、人間を交代したんですね。

平本 それで銃が違いますから、自分の銃でやりますから、一発の試射をやりました。やったときに私は「待ってくれ」と言った。試射が終わった時点で、次の撃たれるほとんど目の前を落とすところで、待ってくれをかけたわけです。「何ほにも立っておられん。今の死刑の要綱の中に直立不動で死刑を受けるといふ文句はなかったので、半歩開かしてくれ」と言うたら、三人ぐらい後ろに立っている人間とゴチャゴチャ話をしよりまし

たけれども、「半歩開いてよろしい」と言うんで、一発目がドーンと響いたときには、いわゆるれんがづくりの家ですから、もう町田が撃たれたときより大きい響きがあったような気がしました。ずうっと、目がぐるぐる回るような状態の中で、耳せんをしとったから、ポタポタと血が流れた記憶もありましたし、目の前を見ると、人間は見えないのに銃口だけはよく見えて、あら、これはわしは撃たれていないぞ、まだ助かっておるぞ。そう思った瞬間、二発目が鳴ったけれども、二発目は完全にそれた、私の目から見れば相当離れて弾が行ったような気持ちでした。続いて三発目が来るときに、これは勝つんじゃないかという意識がしましたね。そうしたら、ポウというて煙が出まして、「ニハラシヨ」と言うて、こっちへ詰め寄ったけど、それで、後ろに立ってる三人と、四人がドドドッと駆け寄ってきて、台の上上がった、私はまた火の中に突き落とされるような気がしましたけれども、ダーッと両方から上がってきましたから。そうすると、上に二人兵隊が立っておるんやから、六人になります。これは、もう下げて放り込まれるという気

がしましたところ、撃った人間が「ドラスチー」言うて、握手して、「平本さん、おめでとう、あんたの死刑執行は終わったから、これから国外追放になりますよ。第二の平本君のために、どうぞ」と言う。それで貴賓室に連れていきまして、ブトウ酒で乾杯してくれました。

それで私は、国外追放になりました。国外追放になる三か月の間は、無食営倉十五日もありますし、足も、指が一部切りの拷問で切られています。

十五日間の無食営倉はつろうございました。私の当番兵が命がけで十五日間、営倉に入っているときに、服をかえてパンを私のところへ持ってきて、どうやって収容所を突破して私の営倉に来てくれたのか、本人とは話はいないですからよくわからないですけども、「平本班長、絶対に生きて帰らにゃいけんよ」と言って、小さな窓から黒パンを入れながら語ってくれたのが、今も印象に残ってますし、また恩人だと思っています。「婦りを気をつけんと、おまえが殺されたんじや、わしが助かって何にもならんぞ」と。収容所と、営倉というんですか、死刑囚を入れるところとは相当距離があったか

ら、今時分は収容所に着くころじゃないかなと思うところに銃声が二、三発したから、撃たれたんだと思っていましたけれども、それは別の事件じゃったわけで、生きて帰って、現在も健在です。

聞き手　そうですか。それはおめでたいことですね。それからどうせられたんですか。

平本　国外追放になりました、清州の錦山（クムサン）に一か月。そこからすぐに、今度は日本へ送り返されるんだとおったたら、また汽車に乗せられて、平壤の三合里へ連れていかれた。そのときがもう六月ごろです。それから半年間、三合里でコレラの病氣と闘って、無事で、コレラにならずに、十二月三十一日に興南から船に乗せられまして、三日かかって、佐世保へ上陸した。

聞き手　どうも大変ありがとうございました。ひとつ今後とも元気で、よろしくどうぞ。